

蝦夷国 よびろし 夏堀正元

〈上〉

中公文庫



中公文庫

えぞこく
蝦夷国まぼろし (上)

定価はカバーに表示してあります。

1998年3月3日印刷

1998年3月18日発行

著者 なつぼり まさもと
夏堀正元

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104-8320 東京都中央区京橋 2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA,INC. / Masamoto Natsubori

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-203087-0 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

蝦夷国まぼろし

上 卷

夏 堀 正 元

中央公論社

目次

第一章	砂金の燦めき	7
第二章	異形のひと	79
第三章	魔の山	122
第四章	騙し討ち	166
第五章	曙　　光	213
第六章	北前船	262
第七章	潜入者	326

下巻目次

第八章 地蔵の眼

第九章 地図のない国

第十章 探検への道

第十一章 大乱発す

第十二章 迫る危機

第十三章 決戦のとき

終章

解説

黒古一夫

蝦夷国まぼろし 上

第一章 砂金の燦めき

福山ふくやま（松前まつまえ）城下から北へ四里ばかりのところに、悠揚たる巨大な山塊をみせているのが、鬱金嶽うこんだけである。いまの標高でいえば一〇七二メートルの高峰で、元和年間げんな（一六一五〜一六二四）のころは大千軒岳だいせんげんだけといわれるようになっていた。

尾根つづきには、一〇五三メートルの前千軒岳まえせんげんだけをしたがえて、山深い連峰となっている。ところどころに緑色または褐色の凝灰岩ぎょうかいがんが露出しているほかは、ブナを主とする原生林に覆われている。山中にはチシマザサやナナカマドの群落地がみられ、遠くからみるとなだらかな山容も、ひとを寄せつけない原始の姿をもっている。

大千軒岳と前千軒岳とのあいだの台地には、イワウメ、コケモモ、ミヤマヌカポ、コメバツガザクラ、エゾカンゾウ、ヒメイチゲ、ミヤマリンドウ、ミヤマキンバイ、キバナシヤクナゲ、ホソバトリカブトなどの高山性植物が、可憐で美しい花々を咲かせているが、

これは近世の登山家や学者によって発見されたものだ。

元和年間、原生林にかこまれたこの連峰を中心とした一帯に、ときならぬゴールド・ラッシュが沸き起こった。山中から流れる大沢川、知内川しりうちなどの各河川の流域で、大量の砂金がみられたのである。

もともと蝦夷地えぞちの黄金伝説は、鎌倉時代からつづいたが、それが単なる伝説ではないことは、松前藩初期の藩主は知っていた。少量とはいえ、蝦夷地の各所からひそかに砂金を採取していたからである。なかには、なにも知らないアイヌが砂金の塊かたまりを持ってくることもあったといわれている。

これは、幕府の禁令にそむく行為であった。慶長八年けいちよう（一六〇三）、家康が江戸に幕府を開いてからは、全国の金山、銀山はすべて幕府に届けでて採掘の許可を得なければならぬことになっていた。だが、松前藩は誕生したばかりの幕政の整わないことに乗じたかのように、砂金採取のことは黙っていた。いざというときは、アイヌが持参したことにすればよい、とでもしようとしたのであろうか。

とはいっても、家康が幕府を開いた翌年には、早くも蝦夷地金山の採掘を幕府に願ひでる者がいた。そのことはすでに、蝦夷地の金山がなかば公然となっていることを示すものだった。

家康はこの出願を許さず、「蝦夷地の金山、銀山は松前藩主慶広よしひろにまかせる」こととした。

このため、蝦夷地の金山採掘に執念を燃やした金山師たちは、慶長十三年（一六〇八）に渡航してきて、松前藩から採掘許可を得ようとした。

「藩としては、行く末を考えねばならぬ。このさい深慮すべきことである」と五代藩主慶広は慎重策をとり、その願いを断わった。慶広の「深慮」とはなんであつたのだろうか。おそらく、

「このような小藩にとって、金山あるいは砂金は貧しい藩財政をうるおす最高の宝物である。みだりに採掘を許可して乱掘におよべば、悔いをのこすことになる。蝦夷地領内には、ほかに金山や砂金を採取できるところがあると思われる。それらを藩自身が踏査してから、計画的にことをおこなうべきである」

歴代藩主中、英邁えいまいな慶広はそのように「行く末」を考えていたと思われる。

だが、慶広の死後しばらくして七代藩主となつた公広きんひろの代になると、祖父の慎重策は改められた。金山開発を積極的におこなつて、一粒の米も穫れない貧しい藩の財政を一挙に豊かにしようと考えた。そのころになると、

「松前藩領、金山多し」

というのは金山師たちの定説となっていた。

そこへ、元和年間の大千軒岳を中心とした、砂金の大量発見である。津軽、久保田（秋田）、南部、仙台、庄内、会津からはいうまでもなく、江戸や京坂地方からも金山師がやってきた。彼らはそれぞれの地方の貧農や零細漁民やあぶれ者まで連れてきて「金掘り人足」にしたのである。

最盛期の元和五年（一六一九）には、五万人以上、翌年には六万人以上の「金掘り」が渡来、大沢川、知内川の流域を主として大きな集落をつくるほどだった。たちまちのうちに千軒以上の小屋が建てられたところから「大千軒岳」の名がついたといわれている。

松前藩はこのゴールド・ラッシュに気をよくし、元和六年（一六二〇）には大沢川周辺からでた砂金百両を幕府へ献上した。このころになると、各藩は領内の金山、銀山の一部の利益を幕府に上納し、幕府はいったん受け取ったのち、それを藩に還付するという形式が、定着していたのである。

したがって、幕府は百両分の砂金を松前藩に還付するとともに、領内のそのほかの金山、銀山を下賜したのである。だが、百両もの砂金献上には、藩重役から異論がでた。

「すでに慶長九年、家康公から領内の金山、銀山についてはわが藩に下賜されているのだから、砂金百両の献上は、幕府にたいしてあまりにへりくだった態度ではないか。畏敬に

すぎる」

というのである。これにたいしては、

「しかしながら、金山、銀山の再開発についても幕府の許可なしにはできないのだから、わが藩のとった措置は適當といえる」

との反論が強かったのは、幕府につまらぬことで睨にらまれるのを避けようという小藩の思惑があったからだ。

その後、砂金採取は順調にすすみ、元和七年には江良えら、清部きよべあたりへ移動し、さらに知内うち方面へ手を広げていった。

蝦夷地の砂金は思ったよりも多く、寛永五年かんえい（一六二八）に大千軒岳の山腹での採金がおこなわれ、それ以降も赤神で白銀の産出をみ、沙流さる、シベチャリしべない（静内しずないのアイヌ名）、十勝などかなりの範囲にわたって砂金を採取した。

のちに仙台藩の医師で蝦夷地に渡来した工藤平助が書いた『赤蝦夷風説考』（赤蝦夷とはロシア人）によると、

「知内から採取した砂金は数十万両にのぼる」と記されている。

松前藩では各地に番所を配置して、番役人を番小屋に住まわせた。とりわけ知内川本流

の大千軒岳六合目あたりの番所と、千軒地区の東端にあたる御番坂の番所には、常時数人の役人を交替で詰めさせた。

「金掘り人足の作業を督励し、砂金の不法持ちだしや盗掘を嚴重に取り締まること」

それが番役人の役目であった。

和久内進六は、知内番所に常駐する二十四歳の藩の足輕であった。

「無事にこの大任を果たせば、おれも死んだおやじのように士分に取り立てられる」——その思いが、あたかも砂金の燦めきのように彼の心をとらえていた。

進六の父親は、十三年ほど前には仙台支藩である岩出山藩一万五千石に仕える川又信四郎という「書き役」であった。儒学好きの生真面目で、小心者の三十石取りの藩士で、その真率な勤めぶりが上役に認められて、加増の話がでていた。

小禄とはいえ、川又家の生計は苦しくはなかった。妻のいさが藩内の大百姓の娘で、しばしば実家から届け物があつて、日常の暮らしむきはすこしも困らなかった。

だが、加増の話は、同僚から小心者、臆病者と侮られていた信四郎にとって、彼らの嫉みを買う結果となった。

城下の飲み屋で二人の同僚と、それだけは欠かせない好きな酒を飲んでいたとき、悪酔いした大兵肥満の同僚のひとりが、毒をふくんだことばで信四郎をからかった。

「大百姓の娘を女房にするのもいいもんじゃな。暮らしむきもさることながら、上役への賄いも、なんとかなろうというもんじゃからな」
まいな

これには温厚な信四郎もむっときて、一瞬顔色が蒼褪めた。
あおざ

「おや、こりゃ、どうやら凶星だったようじゃな。そう顔色が変わるところをみると……」

と、相手はさらにからんできた。

「おい、田之浦、いい加減にしておけよ」
たのうら

仲間のひとりがひきとめたが、田之浦甚八はそのことで、かえってむきになった。赤黒い大きな顔を突きだして、酒臭い息を吐きかけながらいいつのった。

「百姓出の女房の実家のお蔭で、ご加増話が飛びこむとはな、天下の伊達藩の武士も地に墮ちたものよ。なんならこの次は、器量よしで評判の女房殿を賄いに差しだしてみるかね、二倍のご加増は間違いなしだ」
お

もともと酒癖のわるい男とはいえ、田之浦甚八のそうした罵詈雑言には、小心者の川又信四郎もさすがに怒りに身を震わせた。

「許せぬ！ この場で手について謝れ」

信四郎は逆上したように眼をひきつらせて、わめいた。

「ほう、こいつは面白い。謝らなかったら、いったいどうする気かね」

田之浦は大きな赤黒い顔でせせら嗤わらった。

「ウム、このうえもない辱はづかしめをうけた以上、貴様を斬きる、斬らねばならん！」

信四郎は頬ほおをひきつらせて、呻うめくようにいった。

「ますます面白い。それではちよいと表へでて、いっちょう斬り合ってみるかね」

腕に覚えのある大兵肥満の田之浦は、かたわらの刀を手にとると、酒臭い息を大きく吐いて立ちあがった。

「まあ二人ともやめろ。いかに酒のうえとはいえ、田之浦は口が過ぎた。川又に謝罪せねばなるまい」

いくらか年かきの石本恭之助いしもときようのすけが立ち上がって、ふたりのあいだに割って入った。

「心配するな。おれの刀で川又をおもしろおかしく舞わせてみせるだけのことよ。そのあとで命請ごいをするのは、彼のほうだ」

田之浦甚八は大きな図体ずうたいを揺らして高笑いをした。

「よし、見事、貴様の刀でおれを舞わせてもらいたいものだ」

江戸勤番のとき、小野派おのはいつとうりゆう一刀流の道場で剣術を習ったものの、川又はおのれの腕には自信がなかった。だが、自分ばかりか献身的な働き者の妻まで侮辱おじよくされたことは、刀にか

けても許すわけにはいかなかった。

へだいいち、このまま相手の罵言ののちを見過あやごしにしたら、おれは今後ますます侮あなどられる存在になるだけだ。

そうした思いも、彼の決意を固いものにしていた。根が生真面目な性格だけに、彼の憤激は深く、勁つよかった。その氣迫に吞のまれたように石本恭之助は、「真劍はいかんぞ、真劍は……」とうろたえ氣味につぶやくばかりだった。

川又はそれを聞き流して、刀を手挟むと先に表へでた。戸外は満月に近い月明かりであった。いくら歩かぬうちに人家の途絶えたあたりに草原があつた。その草原からは岩出山城が黒い影のようにみえていた。川又はそこで悠然とやってくる田之浦を待った。

月光を全身に浴びた川又信四郎は、不思議な感覺を味わっていた。いましがたの激怒が、憑つきものが落ちたように消えて、妙に冷靜になつていた。

儒学の教えの断片がいくつか、頭のなかを掠かすめていったが、それにはほとんど意味を感じなかった。いうならば、彼はこのとき、不感無覺の心境に入つていたのである。

月の光に草が光るその場で二人の武士の決闘は、思ひのほか束つかの間で決着がついた。月明かりを背にした川又が刀を青眼せいがんにかまえると、大男の田之浦甚八は自信たつぷりの様子で、大上段に刀をふりかざした。そしてまをおかず、鋭い氣合いもろとも、斬りこん